# 無駄遣いの帝王

なぎら健壱

絵・江口修平

昭和三十年代、日本はようやく戦後復興期から脱出し、生活に余裕が生まれた時代である。そうは言っても、一般家庭はまだまだ生活に困窮していた。我が家も同様である。子供心に裕福だとは思わなかったが、貧乏だとも思わなかった。周囲もみんな同じような生活レベルであり、それが貧乏を緩和させてくれていたのかもしれない。

娯楽に対して徐々にお金をかけられるようになった時代ではあるが、やはり生活に対するお金が優先された。子供の小遣いも、考え方によっては娯楽に対する出費である。

我が家の小遣いは一日一〇円であった。記憶が曖昧だが、小学校の四年生ぐらいまで変わらなかったのではなかろうか。駄菓子屋では一〇円で、物が二品買えた。しかし駄菓子屋でいっぺんに一〇円を使ってしまえば、それでもう一日終わりである。あとは何も買えない。貸本屋で一〇円の漫画本を借りると、駄菓子屋にも行けなかった。露天商が魅力的な物を売りに来ても、夕方紙芝居がやって来ても傍観しているしか術がなかった。銭湯の上がり際にコーヒー牛乳も飲めなかった。皆が同等であれば何も感じなかったのかもしれないが、中には小遣いが一〇円以上という子もいた。学習塾で休憩時間、みんながお菓子屋に駆け込む中で、すでに小遣いを使ってしまっている子供たちは、お菓子を持った子供たちを斜めに見ていた。あたしもその中の一人であった。

ちょっとしたお金のかかるものを買おうとすれば、親から「小遣いをためて買いなさい」と言われた。小遣いをためるということは、駄菓子屋にも行けないということである。つまりある意味で、友達付き合いも制約されることになる。我が家はずっと――高校生の頃まで小遣いが少なかった。高校時代は昼食代にと貰った一〇〇円を削ってコッペパンひとつですませ、その金を貯めてレコードを買った。

その反動であろうか、自由になる金を使えるようになった頃（今もなお）、自分で言うのもなんだが、あたしは無駄遣いの帝王となった。まるで必要のない物を買ってしまうのである。しかもタチの悪いことに、分かっていながら買ってしまうのである。我が家にはそうした物がゴロゴロしている。しかし子供の頃に染みついた貧乏性というものは、そう簡単に抜けるものではない。必要ないと分かっていながら、手放すことが出来ないのである。お父さんお母さん、すみません。こんな大人になってしまいました。

なぎら・けんいち●シンガーソングライター。1952年東京の銀座（旧木挽町）生まれ。以後葛飾区、江東区で育つ。音楽活動のほかに、映画、テレビ、ラジオの出演や新聞、雑誌の執筆などで幅広く活躍。趣味が多く、カメラ、自転車、散歩、飲酒、がらくた収集など。近著に『東京路地裏暮景色』『町の忘れもの』（筑摩書房）。CD アルバム『夜風に乾杯』『風致空地』が好評発売中。